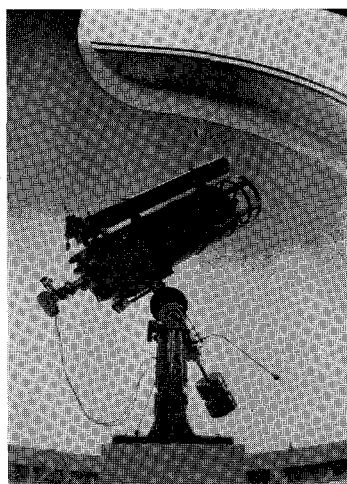


◇ 11月の天文暦 ◇

日時	記	事
6 22	上 弦	
8 5	立冬 (太陽黄経 225°)	
9 16	木星 合	
10 5	月 最近	
18	金星 内合	
12 8	土星 衝	
13 16	望	
21 8	下 弦	
22 3	月 最遠	
23 2	小雪 (太陽黄経 240°)	
29 6	朔	
15	金星 留	



戦後しばらくは、東京天文台、国土地理院と協力して日本列島の位置を決定するため、各地に観測班が送られたものである。

写真に示した望遠鏡(カセグレン型、φ30cm、f=5m)は星食測地用のもので、移動に便利のように架台部は3つに分解で

きる。受光器はロータリー式で、光軸に45°傾けて置かれた磨かれた真鍮板に、直径0.3mmから2mmまで、6段階の大きさの小穴があげられており、背景の明るさに応じて切り換えて使用される。これによると、穴の周囲の反射面で星のミスガイディングがチェックでき、また暗い星を直接ダイアフラムに導くことができ便利である。

現在、同型の望遠鏡が白浜、下里(和歌山県)におかれ、倉敷の観測所の12インチ(f=10m)と共に、年間400星(その内光電観測2割)に及ぶデータを得ており、その成果は、地球自転速度の変動や天体の基準座標系の研究の貴重な資料となっている。

諸外国でも、最近では、星食観測の重要性が再認識され、大望遠鏡による経常観測が計画されているようである。我々としても、今後さらにこの分野の研究を発展させるため、もっと口径の大きな望遠鏡を導入し、そのデータを質、量共に向上させることを念願している。

(山崎 昭)

水路部の12インチ光電赤道儀

水路部の星食観測の歴史は古い。明治18年(1885)、当時麻布飯倉にあった海軍観象台での観測が、本邦最初の観測であったと聞いている。しかし、星食観測が経常業務として行なわれるようになったのは戦後間もなくの頃である。第2次大戦の勃発と共に天文暦の輸入が止まり、昭和18年に、わが国で始めて独立推算した天体位置表が刊行されるに至ったが、この暦の精度を維持し、その向上を計るためには星食観測が極めて重要であるとの考えから、白浜(伊豆)、倉敷の各水路観測所に望遠鏡が設置され、本格的な観測がスタートすることになった。といっても、戦後の観測機材の入手難もあって、当時の観測はすべて眼視で行なわれた。

その後、光電子増倍管の入手が可能になり、眼視観測から光電観測へ、その精度も飛躍的に向上し、星食観測の測地学的利用の道も開かれるようになった。現在では、遠隔地点間の測地測量の主流は、衛星三角測量に移ってしまったが、当時としては、これに勝る手段がなく、

